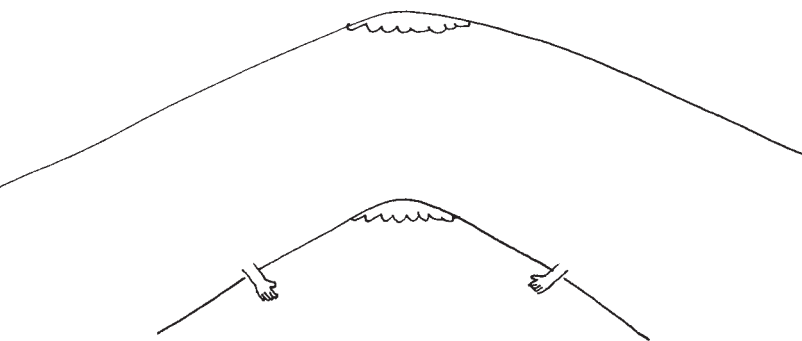


第一問 おとなになるってどんなこと？



私が初めて大人になったと思えた瞬間を、私ははつきりと覚えていきます。

それは情けないことにそうとう遅く、中学生のときでした。

私の子ども時代は、周囲にたくさん愛情深い人たちがいたことはとても幸いでしたが、けっこう過酷なものでした。

目に軽く障害があったことも、母が体調を崩してから高齢出産で生まれた子どもであったことも、繊細な感受性を持つ私にとっては大変なことでした。母は愛情深く

陽気な人ではありませんでしたが体力がなく、私を産んでからはもうほとんど子育てができないくらいの状態だったのです。

その中を生き抜いてきたせいか、私にはものすごく凶太いところと繊細なところが変なふう同居しています。それから傍若無人ぼうじゃくぶじんなところと、人の顔色をよく見ているところもおかしな配分で混じっています。

それは私の子ども時代のサヴァイバルに関係した特徴的な性格で、昔も今も変わりません。

人間は、小さい頃から実はそんなに変わらないものなのです。だから人生はいいものなんだけれどね！

大人になった後は、子ども時代を取り戻して本来の自分に戻っていくことがいちばん大切です。

いったん大人になってから、あらゆる場面で最も必要とされるのが子ども時代の感覚なんです。それだけが人生を進むための羅針盤なのです。どの職業の人でもどの年齢でも変わりません。

ただ、子ども時代に体験したことの価値や、自分もともと持っているものの重要さというものは、いったん大人になってからでないと全く意味をなさないので、人生ってほんとうによくできているなあと思います。

今思うと、中学生のときの私は一種の鬱状態にあったんだと思います。

母親代わりに私の面倒を見てくれた姉が京都の大学に進学して家を出たのが落ち込みのきっかけでした。

姉が旅立つ前の日、大泣きしていっしょに寝てもらったことを覚えています。姉にとってはそれは自由への楽しい門出でしたが、私にとっては保護者を失うに等しい恐ろしい状況だったのです。

私と同じく姉っ子（笑）だった母は淋しさのあまり、どんどん心を閉ざしていきました。

父はやつと子どもが自立の年齢に入ったことで、仕事

に没頭できる時期に入っていました。

姉はこれまでと違い私と共通ではない自分だけの友だちを作り、自分の世界を楽しむことを始めました。私が淋しいのに姉は楽しくなっていていっている、その事実もまだ幼い私には受け入れがたいものでした。

今だったら祝福してどんどん応援してあげられたのに、と切なく思います。

その上小学校四年から毎日いっしょに遊んでいた私の親友は、クラスが変わったことで、別の友だちと親しくなり始めました。

その時期の私は、生まれて初めて、ほんとうに淋しい

状態になったのです。

それまでは学校でいやなことがあっても、家に帰れば同じ部屋に姉がいて、おやつを食べたり散歩したり、姉の聴いている深夜ラジオの音を聴きながら安心して寝たり、そういうことが私を癒していました。でも、全てがなくなつて暗い部屋にいきなりひとりになったのです。

しかし、やはりあの淋しさには意味がありました。あれを味わつたからこそ、そのあとに大人になれたんだと思えます。

辛いことは、その場ではほんとうに辛いし自分を深いところまでゆがめるけれど、あとで必ずなにかの土台に

なります。そう思って辛抱するしかないんです。ポジティブ思考でも立ち向かえないし、ないことにもできません。みじめでちっぽけな自分と向き合い、砂を噛むみたいな毎日はきつと人生に必須な科目なんです。

でも、私もそのときはまだ大人になれませんでした。

ただ淋しさに溺れて、息もできない状態になりました。

それでも自分で友だちを作り、毎日をなんとか切り開いて行きました。それはたいへんなエネルギーを必要とすることだったのでいろんなことが面倒くさくなり、ある意味全てに関して受け身の状態になりました。自分で考えるよりもなんとか目の前のことをこなすので精一杯





だったのかもしれない。

私はその当時母の親友に英語を習っていたのですが、それがまたうちから遠くて、たいへんでした。毎週千駄木から武蔵小金井まで一時間かけて通っていたのです。

みんなと遊びたい土曜日の夕方にひとりで武蔵小金井に行って、二時間英語を習って、夜ひとりで帰ってくる……それがけっこうしんどくて、でも、やめたいなんて言えるはずもなく、ただただらだらと通っていました。

今の私なら買い食いをしたりお茶したり、書店に寄る口実にしたりしていろいろ楽しめると思うのですが、その頃の私にはそんな余裕はありませんでした。